5人は恋人がいた。

（大江町）　和泉式部　1011年頃

あらざらむ　この世のほかの思ひ出に
いまひとたびのあふこともがな

―― 私はこの世のものではなくなってしまいます。あの世へ行ってからの思い出に今度あなたにお会いしたいのです。――

※ 丹波なる吹風山の紅葉は　ちらぬ　さきより　たのもそ　おもふ。

ふくちやま。　＝宮津行道中にて詠む。＝　ご当地

（三和町）　紀貫之

＝梅宮神社（山城・淀馬場）より＝

福知山で詠む？

人はいさ　心も知らず　ふるさとは
花ぞ　昔の香に　にほひける

―― 長谷寺の宿のおかみさん。そなたの本当の心はどうだかわからない。だがそれでも　昔なじみの　この地には
梅の花が昔のままいい香りで　美しく咲き誇っているわね。――

（夜久野町）　藤原定家（小倉百人一首　定家）　1215年頃

来ぬ人を　まつほの浦の夕なぎに
焼くやもしほの　身もこがれつつ

―― いくら待っても来ない人を待ち続け　松帆の浦の夕なぎの時に　焼く藻塩のように
私の身も　恋こがれています。――

※ 朝日さす　日置の里をながむれば　卯の花ひらく　なつかしきかな　ご当地

＝天の橋立への道中　高倉神社で詠んだ。＝

↑
綾部の高倉

知識として知っている人は

資料は丹波茶屋。

"美女と名人に逢える奥京都"

百人一首ゆかりの吹風山（播磨山）

（生野の里）　小式部内侍　997年頃

大江山　いく野の道のとおければ
まだふみも見ず　天の橋立

―― 母のいる丹後は遠く、私はまだその地を踏んでおらず　母のたより　もないません。
大江山、生野の道はあまりに遠い、天の橋立も……。――

（小野脇の里）　小野小町　840～850頃

花の色は　うつりにけりな　いたづらに
わが身世にふる　ながめせしまに

―― あっという間の人生は花の命は短いものね、誰でも年はとりたくないわ、
けれどいつかは、ばあさまになる……。――

ご当地

※ 必ひらけば　法のこころの　正明寺　物淋しきは　小野脇の里

＝地名が詠いこまれている！＝